

---

# 鏡音リンレン小説集

レンナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鏡音リンレン小説集

### 【コード】

N6570M

### 【作者名】

レンナ

### 【あらすじ】

鏡音リンレン達が歌い、作られた音楽のお話。

時にはあなたがよく知る曲もあるかもしれません。

## 狂った愛の、物語

街角であの人を見かけた。

隣には知らない女。

なんで？

なんであの女があの人側に居るの？

ほんの少しピンクがかかったロングの髪に赤い瞳。

何よ、可愛い子ぶって。

でもね、いくらあがいたって彼は私のことが好きなの。

多分ね。

だから、私は彼をずっと愛してる。

恋焦がれてる。

蝕まれてる。

だけどいいの。

これが素晴らしい、「恋愛感情」ってものだから

狂 現 愛 情

「ねえねえ、レン君ー、どっか行くところ？」

「えー？僕そんなにお金ないよ？」

「私が払うから！」

…何なのよ、あの女。

レンに付きまとって。

レンが迷惑がってるじゃない。

第一、レンには私だけが側に居ていいの。  
なのに、ナンデ？

ナンデアンタガレンノ側ニ居ルノ？

レンは私だけのものなのに。

ああ、そっか。

レンに近づく害虫は駆除すればいいんだ。  
なあるほど。

よし、早速実行しよう。

「レン君ー……、！？」

？

彼女、健音テイの声が遠ざかる。

数秒経つと消えてしまった。

まあいいや。

僕にはあの子が居るからね。

「やあーつと捕まえた…、ふふつ。」

嬉しそうな声で怪しい笑みを浮かべながら女に歩み寄る。

ここは人気の無い場所の路地裏。

ここなら誰にも見つからない。

そう思い、私は女の首に手を伸ばす。

「！？……ッ！……うぁッ……！や、やめて、く、苦し……、かはっ……」

この女、テイって言ったかしら？  
そのテイとやらが苦痛で歪ませた表情を浮かべている。  
でも、それも終わってしまった。  
あ、

死 ん じ ゃ っ た

でもいいよね。

だってレンの側に居た罰だもの。

アンタがレンの側に居た間はもつと私は苦しかったんだから。  
これくらいの罰は受けてもらわなきゃね。

「さて、テイ、だったかしら？じゃあね、バイバイ。どうか天国…  
じゃなかった、地獄で頑張ってたね。」

そう告げると路地裏を後にする。

何事もなかったかのように。

いつもの表情で。

テイが戻ってこない。

何があったのだろう。

何故か、心が、好きでもない女を心配してしまう。

僕の本命は、あの子だけなのに。

あ、あの子が戻ってきた。

街を、いつもの笑顔で歩いている。

だけど、知らない内に、どこかで会ったのかカイト兄さんが居た。  
いくら兄さんでも、彼女だけは譲れない。

だって、あの子の側に居ていいのは僕だけなんだから。

あの子、リンだってそう思ってるよ。

リンだって、リンだって僕が好きなんだよ。

きつとね！

カイ兄、どっか行かないかな。  
さつさとどっか行かないかな。

私はレンと居たいのに。

そう思いながら、棧橋へとたどり着いた。

はあ…。

川は綺麗な流れだけでも。

私の心の流れは凄く汚い。

隣が、アイスを持って優しく微笑んでるカイ兄が。

レンだったら良いのに。

そう思いながら。いつの間にか。手が、動いていた。

体が、自然にカイ兄の背中を押す。

その瞬間

カイ兄は川へと落ちる。

物凄く驚いた表情をして。

嗚呼、ごめんなさい。

でも、これで良い、と思ってしまう。

自分の家族とも言える存在が一人、消えたのに。

なんでだろうね。

私の心が、私自身が。

レンのことでいっぱいになる。

カイ兄は、今頃流されながら溺れ死んでるっていうのに。

それほどまでに、私はレンが好きなんだろうか。

嗚呼、きつとそうだ。

じゃなければ、テイやカイ兄を殺したりしない。

そう、確信がついた。

数分が経つと、私はレンを見つけたフリをして話しかける。

「あっ、レン、こんにちは！こんな所に居たなんて思いもしなかったわ。」

笑顔でリンが話しかけてきた。

相変わらず笑顔は可愛いなあ。

でも、今まで僕に気づいてなかったのが寂しい。ただ、僕は気付いたフリをして返事をする。

「こんにちは。僕も、リンが居たなんて思いもしなかったよ！」

こっちも笑顔で話しかける。

リン、僕の笑顔、気に入ってくれてるかな…。

「ふふっ、そうよね。あ、後ね、私レンに言わなきゃいけないことがあるの。」

「何かな？」

リンが、何やら僕に言わなきゃいけないことがあるらしい。何だろう。

凄く気になる。

そわそわする。

あ、僕からも言っておかないと。

「あのね、リン、僕も言わなきゃいけないことがあるんだ。」

レンが、何か言うみたいだ。

でも、私もあえてレンの言うことに自分の言うことを混ぜてみる。いくら言葉が違えど、ハモるのはなんとなく嬉しい。

相手の口が動き始める。  
それに合わせて私も口を開く。  
何を言われても今は怖くない。  
だって、怖いものなんて何も無いわ。  
あるとすればあなたの美しさ。  
他のものなんて目障りなだけ。

「リン（レン）、間違いないさ（わ）、貴女（貴方）、僕（私）を  
好きなんでしょう？ 気づいてないだけなのさ（よ）。だから、今す  
ぐに教えてあげる」

言うことが、同じだった。  
嬉しかった。

レンが私を好きだと言ってくれた。  
嬉しすぎて死にたくなるくらいだった。  
その瞬間、レンを軽くナイフで刺してしまう。  
でも、レンのとった行動も同じ。

「ごめんね…、レン（リン）…。赦して…？」

少し、反省する。  
ごめんなさい。  
そう心の中で反省した、後、もう一度口を開く。  
また、ハモった。

「赦してなんてどうして（かしら）なのさ？ 何も悪いことなどない  
でしょう？ 謝るのは僕（私）の方だ（わ）よ。止められないのごめ  
んなさい」

そう言って笑う。  
私も、レンも。

「貴方のこと考えるだけで、嬉しすぎて壊してしまいそうなの。」  
そう言うとレンは優しく微笑んでナイフを抜き取る。  
私も相手のナイフを抜き取る。  
服が、赤に染まる。  
だけどどうでも良かった。

「あなたという存在の全て、手に入れるまで離してあげない」

両者がそう言う。

私達は倒れた。  
死にはしない状態だけれど。  
想いすぎでこんなことになるなんて、ね。

恋煩い　そして蝕まれ  
尚も焦がれて加速する衝動  
ただただ貴方（貴女）を思い尽くして  
八万六千四百秒

恋煩い　そして蝕まれ  
尚も焦がれて加速する衝動  
ただただ貴方を思い尽くして  
八万六千四百秒

恋煩い　そして蝕まれ  
尚も焦がれて加速する衝動  
ただただ貴女を思い尽くして  
八万六千四百秒

ただただ

あなたを思い尽くして

六　　千　　八  
　　四　　百　　万  
　　秒

「　　愛　　情　　狂　　現  
「

終

## とある死神の恋物語

その黒づくめの男は、『死神』。

あらゆる命の期限を知る者です。

ただし、自分では生き物を殺しません。

殺せません。

実際に殺すのは、別の執行者 『鎌』たち。

退屈な死神は、人々に紛れて生活してみることになりました。

「鎌を持ってない

死

神

の話」

暇つぶしに街を歩く。

歩いていると、消えゆく者の気配がしたのでそちらへと向かってみる。

歩いて数分。

ここか…。

大きな屋敷がそびえたつ場所から気配がある。

早速、中へと入ってみる。

…なんとということだろう。

とても愛らしい伯爵の娘が、病に倒れていた。

医者からは、「手遅れ」と言われている。

嘆く伯爵達。

私はその娘に近づき、話しかける。

「信じられないと思うけど言う。私は死神だ。」

そう告げると、ただ一人冷静に娘は言った。

「じゃあ殺して」

その言葉に、内心驚きながらも、首を横に振った。

その仕草を見ると娘は言った。

確認するかのように。

「あなた、死神？」

「なら今すぐに私を殺しなさい」

「……？ 私の言うことが聞けないの？」

「死神様って融通が聞かないのね！」

初めて、そのようなことを言われた。

何故だろう。

あと限りなく短い命のこの娘に、恋をしてしまった気がする

なんとなくわかった。  
もう、彼女は生と死の狭間で孤独になっている。  
…きっと貴女も私と同じ孤独で悲しい存在。  
死神でよろしければ友となって差し上げましょう。

死神が街を往く

白い娘を連れて。

残された時は、果たして幸せに満ちた時間…？

死神が街を往く。

白い娘を連れて。

見つけたのは可愛らしい銀の首飾り…

…弱っていく、娘の身体。

期限が近いと悟った。

気遣う、伯爵やシスターなどの大人たち。

それでも、ただ一人娘は強がって言った。

「大丈夫」と

……死神が誰かを愛しても、最後は悲しい結末。  
朽ちないこの身が憎い…。  
貴女と共に、星になりたいというのに…

きっと貴方も私と同じ。  
孤独で悲しい存在なの。

…でも貴方と過ごせたから、私は幸せになれたの

その時を迎えた娘は、晴れやかに笑っていた。

………死神が貴女の記憶、

永久に守って差し上げましょう

寂しくない

「鎌を持ってない

死

神

の話

完

## 一番長い、悪ノ双子を巡る悲劇の物語

Story 1 双子

むかしむかしの物語。

あるところにわがままな王女と召使がおりました。

「レン！ 今日のランチは何かしら？」

玉座に座り、豪華なドレスに身をつつんだ少女 リンは尋ねる。

彼女は14歳ながらもこの国、黄ノ国の王女だ。  
そして顔のよく似た召使ことレンは答える。

「王女の好きなハンバーグ、フレッシュサラダ、デザートにはミカンゼリーです。」

サラリとメニューを言い終えると、レンは失礼します、と言ってからランチが玉座へ運ばれるのを見届けると、隣ノ国、つまり緑ノ国へ買い出しに出かけた。  
緑ノ国へつくと、人であふれかえっていた。  
住人達をよく見なくてもわかるが、この国は特殊で、生まれてくる者ほとんど全てが緑色の髪である。

そしてレンは買い物ほとんど済ませ、最後に彼女会いにゆく。  
ミク、という名のこの国の誰より美しい緑色の髪を持つ、優しい女性に。

「こんにちは、ミクさん。」

レンはミクを見つけると挨拶をして、ミクの隣に行こうとした。だがミクのそばにはこの国の住人ではない男が居た。彼の名はカイト。

この国や黄ノ国の海の向こうにある、青ノ国の王だ。

実のところ、レンはミクに一目惚れをしていて、緑ノ国に買い出しに出かけるのは彼女に会うためでもあるからだ。

しかしカイトもミクの美しさに一目惚れをし、お忍びでこの国へ来ているのだ。

ミクに挨拶をすると、レンはカイトを少し見てからその場を離れた。

離れた場所から、レンが居た時より楽しそうな会話が聞こえてくる。

実はレンはあの男を何度か見ていた。

黄ノ国の城に来ていたからだ。

あの男にリンは一目惚れをし、恋に落ちた。

だがあの男 カイトはミクと仲睦まじく話している。

それに、大の王様がお忍びで来るということだ。

カイトもミクに一目惚れしていたのだ。

リンが求婚をしているのに、カイトはそれを受け入れず、ミクと恋をしていた。

それはレン、リンにとってもつらいこと。

そして惨劇の始まりでもあることだった

「ミクちゃん、もう仕事は終わったみたいだしそろそろ帰る?」

この国で唯一白い髪を持つ娘　ハクはミクに尋ねる。  
ミクはそれに返事を返すと、ハクと一緒に家へ帰った。  
ハクはこの幸せで平凡な時間が続くように願っていた。  
その願いはもう少しで叶うところだった。

## story 2　緑ノ国の壊滅

しかし、とある日、国は戦火に包まれた。  
リンが、ミクからカイトを奪うためミクを殺すために、国民一人一人を殺していった。

しかも、緑の髪の女性だけ。  
その中、ミクはハクの隣に居たはずが、居なくなっていた。

「ミク、ちゃん…？　どこへ行っちゃったの…？」

オロオロをミクが居ないことに不安を抱えながらもハクは家へ戻った。

周りで人々が死んでゆく様を見たくないからだ。  
一方、ミクは意識が薄れゆく中井戸の中に居た。

「ここは…、井戸の中？」

そう呟くと一人の影が近寄ってきた。  
レンの姿だ。

レンは立っただまま涙を零す。  
その手にはナイフが握られていた。  
しかし、彼女はそれに驚くこともなく言った。

「嗚呼、やっぱり私は君に殺される運命さだめだったのね。だけでも私はその死を受け入れる。これが君にとっても、あの子にもいいことだから。あの人がもし、反乱を起こしたらごめんなさい。…、私が言うことはこれで全て言ったも同然よ。さあ、そのナイフで私を刺してごらんなさい。」

優しく彼女は微笑み、彼のナイフを握った手を左胸に当て、深く刺し込んだ。

それと同時に、彼女の左胸からは赤い華が咲いた。そして、彼女は倒れ、最期にこう言った。

「ありがとう…」と。

倒れた後、彼女は息を引き取った。

そして、レンは泣き崩れた。

己の声が枯れ、涙が出なくなるほど泣き叫んだ。

数分が流れ、レンは涙を拭くと国へ一度戻った。

緑の髪の女性は既に居ず、男性達は避難して遠くへ行った様子だ。

しかし、一人だけボロボロの家から出てくる娘が居た。

ハクだ。

この国で唯一生き残った『異端』である。

彼女は荷物を持ち、港町のほうへと走り去っていった。

レンはそれを驚いた様子で見送ると、リンの元へ戻った。

「はあ、はあ…。」

「ここまで来れば大丈夫…。」

満月が綺麗に輝く中、白い髪の娘は教会の中へ入ってゆく。そこにはたくさんのシスターと、メガネをかけた人の良さそうな神父が居た。

ハクは元々ここへ通っているので怪しまれもしなかった。むしろ、歓迎されていた。

そして神父ことキヨテルに一通り事情を話すと、

「わかりました。

今日から神の元で一生懸命生きることが今の貴女の目標です。

個室が一個空いていたので、そちらを使ってください。」

そうキヨテルは微笑み、自室へ戻っていった。

ハクも与えられた個室へ戻り、休んだ。

### story 3 王宮

一方レンはリンに今までのことを話すと、処刑人であり、レンのことを密かに想っているネルのところへ行った。

ネルはレンの表情を見て、胸が痛んだ。

彼がこんなにも悲しそうな顔をしている所なんて見たくない。

そう思い、ネルはレンの悩みに耳を貸す。

一通り話を聞くと、ネルは言う。

「わかった。

アンタのためなら叶えたいよ、その願い。

勘違いしないでね？」

そう告げると、ネルはレンの悩みを解決したかのように胸を張る。

ネルは悩みごとを願いごとに変えて聞いていたらしい。

彼女が実現できるものだけを。

そしてレンがその場を離れると、ネルは涙を零す。

「アンタが王女を守りたいのはわかるよ……。」

でもね……、自らの命じゃなくてアタシを犠牲にしてほしかった……。

レン……、君を私は殺せない……！」

そう言い終わるとネルは泣き崩れ、一人自室へと戻っていった。  
いつもの彼女とは違う、悲しげな表情で。

s t o r y 4

革 命

そして翌日 革命が始まった……

早速計画は実行される。

兵士達が下で戦っている間、レンはリンに告げる。

「もうすぐこの国は終わる。」

リン、僕は今から君の召使じゃない。

君の片割れとして活動する。

だから僕の言うことを聞いて？」「

優しく微笑み、彼女の頭を撫でながらレンは言う。  
そして、リンに告げる。

「敵が来る前に急がなきゃ。  
ねえ、そうだろう？、リン。」

ほら僕の服を貸してあげる。  
これを着てすぐお逃げなさい。  
大丈夫僕らは双子だよ。  
きつと誰にもわからないさ。」

そう言うと双子は入れ替わった。  
そしてレンが秘密の通路でリンを逃がすと、レンは王女のようにふるまう。

その傍らで、柱に隠れた一人の女が悲しげな表情を少しだけしてからレンの前へ出る。  
その後ろには青い男と様々な兵士が居た。  
中には一番隊隊長のルカが兵士をまとめていた。  
そしてその中には処刑人としてのネルの姿があった

レン 否、王女は振り向くと赤き鎧の女剣士ことメイコに話しかけられる。

そして返事を返すと後ろにリンが居ることに気付く。  
リンは秘密の通路を抜けきれず、通常通路から逃げるところだ。  
その時、カイトが入れ替わっていることに気付きリンに剣をかざそうとした…。  
だが、それはメイコによって止められた。  
剣で弾き返されたのだ。  
そしてメイコは言う。

「仮面、似合っていないわよ色男さん。」

そう言われ、カイトは無言で剣を鞘に納める。

そして、メイコは驚き戸惑っているリンに逃げるよう合図をする。カイトにもその合図はバレなかったみたいだ。

そしてリンは王宮を抜け出し、街へ出た。

## story 5 処刑

街へ出ると、レンが捕らえられ、処刑が始まるところだった。

人ごみの中、リンは一番前へ出て断頭台の目の前に立つ。

断頭台のギロチンを下ろすヒモを持っているのはネルだ。

そして、3時の鐘が鳴る。

それと同時に、レンは言った。

リンの口癖、

「あら、おやつの時間だわ」…と。

その瞬間、ネルは涙を零しギロチンのヒモを離す。

そして、悪の王女はついに散った。

鮮やかな彩りの華を咲かせて

そして人々は歓喜の声を出す。

その中、リンは目の前で片割れを失った寂しさを顔に宿しながら港町へ走る。

大粒の涙を溢れさせながら…

港町へリンは着くと、体力が切れたのか倒れてしまった。

リンが倒れ、数時間が経つとあの白い娘、あの国の異端 ハクが助けた。

ハクがリンを助けると、二人はとても仲良くなった。だが、とある日の夜の懺悔室、リンが今までの罪を告白しているとハクが偶然それを聞いてしまった。

翌日、リンは港へ出て羊皮紙を入れた小瓶を海に流すところだった。

願いと書いた羊皮紙を。

しかし、その背後には気づかれぬようにハクが立っていた。

story6 黒い部屋にて ぜんまいじかけの気持ちを込めた子  
守唄

一方レンは黒く塗りつぶされた部屋で目を覚まし、ここはどこだろうと考える。

しかし、考えていても何もわからなかった。

わかるのは天井に大きな穴が空いていて、そこに巨大なぜんまいがあることだけ。

そんな時、ぜんまいの先から誰のかわからぬ声が響く。

「罪深き少年よ

お前はこの先永遠に

この部屋からは出られぬ」

と言った。

レンはその瞬間全ての記憶を思い出す。

自らが重ねてきた罪の数々も。

しかしレンにはその言葉の意味がわからなかった。

だが、声の主だけはわかった。  
彼の愛した女性 ミクだと。

story7 後悔の手紙 リグレットメッセージ

願いを書いた羊皮紙を入れた小瓶を海に流し、リンは振り返える。  
そこにはナイフを振りかざしたハクの姿があった。  
が、ハクは『何か』に気づいたのかナイフを落とし、リンに大粒の  
涙を零しながらひたすら、ごめんね、ごめんね、と繰り返す。  
そんなハクの頭を優しく撫でるとリンはハクの肩を取りながら教会  
まで戻って行った。

story8 Re|birth day

レンの手首には赤い手錠。  
足首には青い鎖。  
それを少し邪魔そうに見ると、ミクに目をうつす。  
次にミクがレンを見下ろすと、少しずつその姿が薄れ、最後にはレ  
ン以外誰も居ない状態になってしまった。  
どこからか「るりらるりら」と子守唄らしきものが聞こえてくる。  
それだけがレンの癒しだった。  
そして何日か過ぎ、レンはその子守唄の真実に気づき、言葉を付け  
足すかのように呟く。

そんな時、ぜんまいの隙間から小さな光が落ちて来た。

よく見ると羊皮紙のようなもの的一部分に見える。

そしてその紙は音をたてずに燃えて消える。

紙には「もしも生…れ変……るな…ば」と所々かすれている字が書かれていた。

その羊皮紙の送り相手は彼にとってすぐわかった。

彼女 リンであると。

リンからのメッセージを受け取り、彼は歌を歌う。

歌を歌い、一息つく。

何かに悔いを残した表情で。

そんなとき、また声が聞こえた。

『罪が消して許されることはない』

ミクの声だった。

ふわりとしていて、それだけ力強い声だった。

だけれども、水という言葉、悪という言葉。

『彼ら』は歌へと変えた。

その言葉達を歌へと変えた瞬間赤い手錠が外れ、レンに語りかけた。

「これからあなたは生まれかわるのよ」と。

そして、青い足枷も外れ彼に話しかける。

「今日が君の新しい Birthday」と。

声が消えると、全ての歯車が動き出す。

ぜんまいを誰かがまいたらしい。

その時、レンの姿は消えかけていた。

体が薄れかけていく中、彼は言った。

「もうすぐ君に会いに行くよ」

と

story 9 & amp; 10 全ての終わり

…貴女に謝らなければいけないことがあるの。

私結局貴女の仇を取れなかった。

だって、あの娘は昔の私。

とてもとても孤独な人。

一人で生き続けること、それはとても寂しい。

あの娘ね、何もできなかったけど。

今日のおやつのリオツシュ、とっても上手く焼けてる。

…ふと思うんだけど。

あの時あの海辺で、一瞬見えた幻覚。

あの少年は一体、誰だったのかしら？

見覚えがある気がするんだけど

よく覚えてないの。

あの時はごめんね、リンちゃん。

守れなくてごめんなさい、ミクちゃん。

それじゃあ、ミクちゃん。  
貴女のことは忘れないわ。  
どうか天国でお幸せに

悪ノ物語

これにて、おしまい

ある時代、ある所の、『囚人』と『紙飛行機』の物語

僕は、セツナイ…、セツナイ、叶わぬ恋をしてしまった。  
柵越しの、恋。

とても病弱な、とても愛らしい少女に。

でも、あの娘と僕じゃ、サガアル。

こんなに汚れた僕と、潔白なあの娘。

それでも、僕は彼女に想いを伝えたくて。

だから、僕は『紙飛行機』に想いをのせて。

柵の向こうへと

飛ばした

紙飛行機が、また、彼から届く。

この紙飛行機は私達のメッセージ。思い出。やりとり。

私は、紙飛行機に返事を書く、彼へと飛ばす。

ふわりと彼へと届く。

今日のやりとりはこれでおしまいだ。

翌日。

彼から、また紙飛行機が届く。

このやりとりは、この牢屋のような病院でいる時の一番の楽しみだった。

でも、そんな時間もおしまいかもしれない。

返事をたくさん書いて、彼へと飛ばしたけれど。

その瞬間をパパに見られてしまった。

パパは、彼 レンって言ったっけ。

レンを少し睨むと、私の手をひいて病院まで連れ戻そうとする。  
嫌、いや、イヤ

行きたくない…！

レンと一緒に居たいのに…！

だけれど、突然胸が痛くなる。

呼吸が、とても苦しくなる…。

嗚呼、意識が遠のいていく……。

あの娘が、あの娘が、連れ去られた。

彼女の父親らしき人に。

悲しすぎる…。

ここであの娘とお別れだなんて。

でもあの娘が苦しそうにしていたのだから、ここは引き下がらなくてはいけない。

そう、僕は思いながら道を歩こうとする。

だが、その瞬間

何者かに押さえつけられた。

両手を押さえられて、抵抗ができなくなる。

必死にもがいたけれど。

それは無駄だった。

それを見下す大人

！？

どうして…、なんで…、



お願い、もしこれが最後なら、僕をあの娘と話をさせて  
狭く暗い閉じたその部屋に、セツナクただその声は響く……

嗚呼、君ともし来世で会えたならば  
もしも、深い闇が二人を引き裂いても、  
深い闇が二人をまた巡り合わせる

うん、来世で会おうね  
きっと、仲が良い双子になったり、  
悲劇に遭っても、死神になったりしても

私達はずっと、ずーっと一緒だよ

囚人と紙飛行機

終……

## 無音の、声の無い銀世界での悲劇

雪が降り始める。

僕らは、今日は休もう、と言ってそれぞれの部屋に戻り、寝た。ぐっすりと。

そして翌日

雪が見事に降り積もり、いまだ少しずつ降っている。

長袖のコートを着て、マフラーをまいて、手袋をする。

で、僕が外に出ようとする就先にリンが外に出た。

リンに続いて、僕も家を飛び出す。

リンは、僕が雪を丸めているのを見て思いついたのかこう言った。

「ねえ、レン、雪合戦しましょう！」

天使のような微笑みを向けてリンは言ってくれた。

それに、僕は「うん」とうなずくと早速雪玉をたくさん作り始める。

遊びに夢中で、気づけば時間がかなり過ぎていた。

「リン、家に戻ろう」僕がそう言った瞬間、リンは雪の上へと倒れた。

息は先ほどまでと違ってものすごく乱れていて、肌も、手も、何もかもかなり冷たくなっていた。

リンを背負うと、家の中へと入ってリンの部屋に向う。

リンの部屋につくと、ベッドにリンを寝かせ、毛布と布団をかけてあげる。

温かいホットミルクもいれてこよう。

ホットミルクをいれて、リンに渡す。

ミルクが湯気を立てて、オレンジ色のマグカップを少しくもらせる。けど、次の瞬間

リンの手から、マグカップが落ちる

そして、割れた。

大きな音を立て、床をミルクが這う。

リンの瞳は、シヨックで震えていた。

まさか

雪を、吸ってしまった？

雪は声を吸収する。

つまり、歌うために声が必要な僕らにとっては十分毒だ。

その毒がもう回ってしまい、神経が麻痺したの？

そんな……………。

リンは一応声は出せるみたいだ…。

それだけでも良かった…。

リンは、「大丈夫」、と言うと微笑む。

僕もそれに微笑み返すとマグカップなどを片付ける。

破片もリンに刺さってないみたいだし、良かった。

それから、数日。

リンはもう、動けなくなっていた。

声を発することも困難で、

何よりも

とても、苦しそうだった

僕はそれを見守ることしかできなかった。  
嗚呼。

何もきないこの身が憎い。  
リンと一緒に僕も逝けたらいいのに。

看病をして、数時間……

リンは既に。

生と死の境に居た。

苦しむリン。

そんな彼女が、弱っていく、期限が近い身体で最期に、こう言った

「ありがとう」と

そうして、リンは息を引き取った。

頬を、大量の涙が伝いおちる。

僕は彼女の亡骸だけがある、ベッドに泣き伏せた。

何故、リンだけがこんな目に…。

僕を、

独りぼつちに、

しないで.....

f  
l  
i  
f  
f  
e  
r  
s  
o  
u  
n  
d  
l  
e  
s  
s  
v  
o  
i  
c  
e  
a  
n  
d  
p  
r  
o  
o  
f  
o

終わり

孤独な科学者と、『ココロ』が無いロボットの、『キセキ』

僕は、たった独りで、初めてロボットを作った。  
この、わずかな、14歳、という歳で。

同じ、14歳の見た目の少女を。

孤独な科学者に作られた、ロボット。

出来栄を言うなら、奇跡。  
だけど

まだ足りないものがあつた。

今、開発中のもの。

それは、ココロ、というプログラム。

だけれども、道のりはまだ長かった。

君のその瞳に映る僕は、君にとってどんな存在？

そう、彼は言つた。

ワタシに、ココロをくれる、トモ言ッてイタ。

ココロ、それニワタシは興味がある。

ワタシの、大切ナプログラム。

だけれども。

彼は、死んでしまった。

でも、知りタイ。

アノ人が、命ノ終リマデ、ワタシニ作ッテタ、

ココロ

…その時、私はモニターに触れていた。  
画面に八、『KOKOROPROGRAM、起動…、82%、読み込み完了……、100%、完了』と表示される。  
…、今、動き始めた、加速する奇跡。  
なぜか、ナミダが、止まらナイ…  
なぜ、私、震える？ 加速する、鼓動。  
これが、私の望んだ「ココロ」…？

…私は知った、喜ぶことを。  
私は知ってしまった、悲しむことを。  
フシギ ココロ ココロ ムゲン  
なんて深く切ない…

今、気づき始めた。  
生まれた理由を。  
きつと、独りは寂しい…。  
そう、あの日、あの時、  
全ての記憶に、宿る  
「ココロ」が溢れ出す…

今、言える、本当の言葉…  
捧げるよ、あなたに…  
！！

アリガトウ…

この世に私を生んでくれて…

アリガトウ…

一緒に過ごせた日々を

！！

アリガトウ…

あなたが私にくれた全て

アリガトウ…

永遠に歌う…

It was exactly a miracle .

The robot that obtained 'Kokoro'  
kept singing .

She sang all of her feelings .

But the miracle lasted only a  
moment .

The 'Kokoro' was far too big for  
her .

Unable to withstand that weight  
t

the machine shorted  
and was never to move again .



C 6 H 4 C I 2

気づいたら歌ってた  
この歌は何だろう

ボクはなんの為に歌う？

ただ意味も理解せず、歌っていた

その答えを求めて走り出したけど、

その先にたどりついて何も無かった

ルール、イコール規則がボクは嫌いで。  
ただ縛られたくなくて。それだけを思っ

だからボクは逃げ出して。

走って走って、息が切れても。

後先のことは忘れて、とにかく走った。  
疲れなんて感じなかった。  
ただただ、逃げたい。そう思っていたから。

指図されるのが嫌で、凄く嫌で。  
少し悪になりたくて、いつそ染まりきってもいいと思って。

深夜家を抜けだして、夜の街を走り抜け。

「何のために生きるのか？」

ボクは、煉瓦の塀の上に居た野良猫に訪ねた。

猫は何も答えずに、ただ見下した眼でボクを見た。

…猫にすら、ボクは愚かだと思われてるんだろうか。

……嗚呼、

すぐ近くにあった自動販売機を見つけ、お金を入れて出てきたコー  
ヒーの缶を開ける。

飲めもしないコーヒーを、ただ飲み干して。

何も思わず、曇る空を見上げた。

今のボクに何ができる？

それすらわからない。

だから、だからこそ。  
ボクは歌い、叫ぶんだ。

- パラジクロロベンゼン -

その意味も理解せず喚く。

まるで、負け犬のように、惨めに。

それでキミは満足できるの？

…掟規則破ったら君は何が変わるの？

そう。

誰でもいい。ぶちまけたい。  
何もかも。

…嗚呼、今のボクはきつと最悪だ。  
しかし、キミには敵わないかな、きつと。

悪を叩いて、正義振りかざす。  
最低だね。だけどこれでいいんだ。

正義盾にストレス解消。

\*\*\*\*\*。

周りが止める、ボクら気づかない愚かな行為

この歌に、意味はあるの？

この歌に意味はないよ

この歌に、罪はあるの？

この歌に罪はナイヨ

\*\*\*\*\*に意味はあるの？

\*\*\*\*\*に意味はナイヨ

\*\*\*\*\*に罪はあるの？

\*\*\*\*\*二罪八ないよ

この歌の意味は…

“\*\*\*\*\*”

ボクはそして気付く。

所詮は全て、偽善なんだと。

ボクだって、君だって。

空になったコーヒーを投げ捨てて闇に覆われた空を見た。

…嗚呼。

今のボクは、ぼくは、…何をしてる？

それすらわからない。

もう、ナンニモワカラナイ

そしてキミはボクを笑うんだろうね。

そして、ボクは君を突き飛ばす。

こんな場所から。ほら、街明かりが華やかで綺麗だよ？

とっても綺麗な場所だね。それじゃあバイバイ。

「…あははっ！」

ほらね。

ボクが正しいんだ。キミなんかじゃなくて。

虚無に包まれては消える。

ボクが、消え去るまで。

さあ、

歌いましょう、踊りましょう

パラジクロロベンゼン

さあ、

笑いましょう 妬みましょう

\*\*\*\*\*

ボクも、何もかも全部、ぜんぶ、ゼンブ、

“\*\*\*\*\*”

さあ、

狂いましょう 眠りましょう

朽ち果てるまで

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6570m/>

---

鏡音リンレン小説集

2010年10月10日05時14分発行